

職人と若手 共に守る伝統

滋賀県西部で江戸時代からと懸命に挑戦を続けている「続く織物「高島ちぢみ」。伝統産業を担う職人の高齢化や後継者不足は、どこでも深刻だが、若手が伝統を受け継ぐ

写真。

布に強い圧力をかけることでできるしわ「シボ」が特徴。優れた吸湿性と速乾性を生

み、肌触りの良い着心地を築くことができる。安価な衣類に押され、年間生産量は1990年ごろの約30万反を境に減少に転じ、現在は約3万反にとどまる。工程別に複数の業者が協力して生産する仕組みで、約10軒が残る。

そんな中、若い後継者の職人らが柔軟な発想で、高島ちぢみの復興を目指している。これまでは主に肌着用に出荷していたが、開発した新素材を使ったワンピースなどを若者向けに販売している。

生地加工を担う高島晒協業組合の平山裕章営業部長(36)は「地域に根ざさないとする若者たちがいる。先代の仕事の様子や楽しさを小さい頃から見てきた証し」と話す。

同組合には30代以下の若者が十数人所属している。昨春、職員になった黒川和寛さん(36)と指導役の中川貴志さん(64)は、ともに滋賀県高島市出身。中川さんは、プリント作業をする黒川さんの手元に鋭い視線を向け「自分でやった方が楽だが、こうやって根気よく教える」と語る。言葉の裏には、一人前になってほしいという黒川さんへの期待。「一緒に苦しんで、一緒に笑う。みんなで作る上げる先に、伝統の継承がある」

【写真・文 山崎一輝】

